

研究推進を見据えた「国民との科学・技術対話」活動支援

白井哲哉○ 神谷俊郎（京都大学 学術研究支援室）

「国民との科学・技術対話」とは...

2008年内閣府より“「国民との科学・技術対話」の推進について”が交付されました。取り組むべき事項として公的研究資金の配分機関はこの活動に取り組むよう『**公募要項などに記載する**』こと、大学・研究機関は『**研究者が積極的に“国民との科学・技術対話”を行うよう促す**』こと、研究者は『**(研究者)自らが国民に対して研究を説明する**』ことが掲げられています。

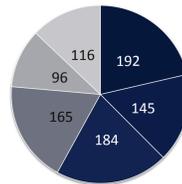
研究者の認識との乖離

2011年京都大学の対話WGでは学内の1942人の研究者に対して「国民との科学・技術対話」についてのアンケートを実施しました。その結果、**「国民との科学・技術対話」で言及されている活動と研究者の認識に乖離がある**ことがわかりました。アンケートでは「国民との科学・技術対話」に相当する活動の有無について、尋ねたところ2/3の研究者（660人回答）が「実施したことがある」と回答。しかし、その具体的な内容は「講演」「授業」といった一方通行の解説という結果でした(右図)。

URAの仕事との関わり

内閣府の交付を受け、科研費の申請書には「本研究の研究成果を社会・国民に発信する方法等」の欄が設けられました。また年間3千万円以上の公的研究資金を受ける研究者に対しては、この活動が義務化される傾向にあります。この**研究者への新たな負担軽減のための支援**と、**研究を巡る対話に向けた本質を追求**すべく、京都大学では「国民との科学・技術対話」ワーキンググループ（以下:対話WG）が始動しました。

「国民との科学・技術対話」として実施した活動内容（660人の京都大学研究者が回答）



京都大学のURA（KURA）は研究者に対して本質的な対話を促しながら「成果活用促進」「異分野連携・融合」「研究マネジメント」を行う

そのひとつの回答が、「京都大学アカデミックデイ」です

京都大学アカデミックデイ2016 / 9.18.sun.

「研究者と立ち話」



一度に200名規模の研究者が参加。ポスターと実物展示を交えて、研究者と来場者が直接話しをします。会場はまさに百家争鳴！

「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」



ちゃぶ台を囲めば研究者も来場者（専門外の人）と同じ目線に。レクチャーとは異なった対話の場です。じっくり膝詰めが京大流！

「お茶を片手に座談会」

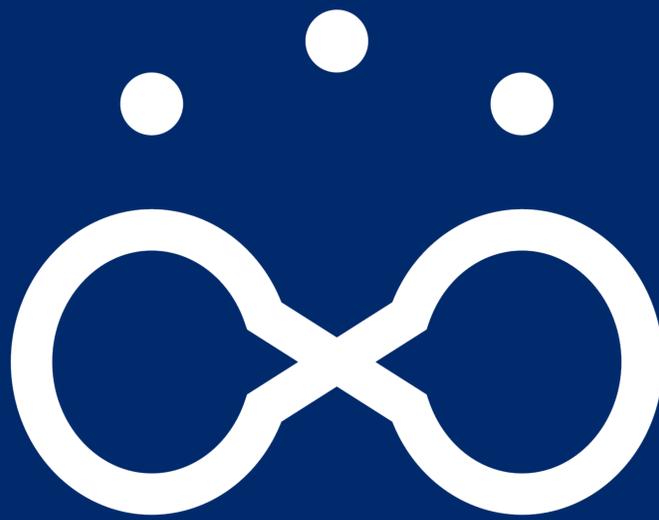


異分野の研究者間の対談。専門領域を跨いだら研究者も非専門家。来場者と一緒に創る学際的な研究シーズ発掘の場

「参加研究者の交流会」



普段話しをする機会のない異なる分野の研究者が出会う場。大事なものを片手に、学際的に繋がるきっかけが生まれます



Dialog with the Public

京都大学「国民との科学・技術対話」ロゴ

「京都大学アカデミックデイ」の作り方

アカデミックデイMTG（教員・URA・職員）キックオフ

アカデミックデイは**研究者（教員）とURAと事務職員の三者が渾然一体**となって企画するのが特徴。URAが三者を繋ぎます。

全出展研究者の情報・写真を掲載各参加研究者は自身の**研究プロジェクトの活動報告書の作成に、この報告書を利用**

研究とURAの支援を発信するサイト K.U.Researchと連携開始



ポスター・チラシの他、ソーシャルメディアを利用した広報を展開
※K.U.Researchは「未到領域に挑戦する」研究者を紹介する京都大学の研究大学強化促進事業サイト (<http://research.kyoto-u.ac.jp>)

出展研究者公募 出展高校公募

参加研究者は公募で募集！
※高校生の出展の場合も数件用意 アカデミックデイでの研究紹介は京都大学外にも開いています

出展研究者に向けた、対話のためのヒントの説明会開催

「国民との科学・技術対話」の主旨の説明の他、**非専門家に向けた研究紹介・対話方法をレクチャー**。対話を促進させるコンテンツ作成の相談も受け付け。

研究者の精神的・労力的負担軽減の他、対話技術を身につけてもらうために実施

「研究者が専門外の人と対話をする」URAによる工夫と支援

対話の場をデザインし準備することで100名以上の研究者の対話活動を支援



アカデミックデイ開催

今まで持っていなかった学外の機能・ノウハウを大学に取り入れる 学内と学外を円滑に繋ぐ役割を果たすこともURAの特徴

Win-Winになるコラボレーションから、アカデミックデイの広報を展開。同時にアカデミックデイでの知を拡散。

京都府立図書館や京大生協でも「研究者の本棚」を設置

外部業者と協力して、当日のレポート作成・拡散を検討

参加者・登壇者に京都大学アカデミックデイ報告書配布

参加研究者・来場者アンケートの結果も報告書に残し、**活動のノウハウを蓄積**
来場者アンケートはノベルティと交換で脅威の回収率！